

二又第1遺跡でみつかった中世のかわらけ（中央市成島）



大津大神堂遺跡でみつかった中世の溝（甲府市大津町）



下向遺跡でみつかった中世のものとみられる石垣（笛吹市境川町）



特集

若手職員が描く、山梨の中世

ぎりぎり

中世

- ・リニア中央新幹線や新山梨環状道路建設に伴い発掘調査が急増している山梨県埋蔵文化財センター。
- ・大規模な開発が少なかった地域での調査であるため、たくさんの中世の遺跡が新たに発見されました。
- ・中でも、「中世」と呼ばれる時代の調査が多くなっています。
- ・「発掘するからには、「中世」という時代や、その時代の県内各地域の特色に迫りたい。」各遺跡の発掘担当者は、そんな思いで、日々いろいろなことを考えたり試行錯誤したりしながら調査を進めています。
- ・本誌では、発掘を担当した（ぎりぎり）若手の三人が、遺跡で考えたことをご紹介します！

● 木製品のミヤマ（37歳）

御山亮済 みやまりょうさい

- ・植物を手掛かりに遺跡を考える人。木っ端も見逃さない。
- ・愛用のバイクで遺跡に颯爽と現れる二児のパパ。



● 意地と執念のクマガイ（34歳）

熊谷晋祐 くまがいしんすけ

- ・水の湧き出る地表下5.5mの深さから古墳時代のムラを発見。
- ・スコップの使い方を2歳の息子に仕込むパパ。



● 石垣に呪われたクボタ（39歳）

久保田健太郎 くぼたけんたろう

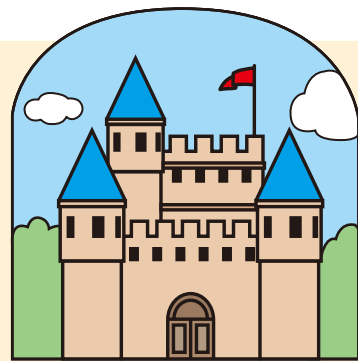
- ・クボタが担当する発掘では、高い確率で石垣が発見される。
- ・長男と次男は、円錐形の構造物を見ると「縄文人のおうち」という。



本誌に登場する、ぎりぎり若手の職員たち

ちゅうせい そもそも、「中世」ってなに？

- ・「中世」のイメージって、右のような中世ヨーロッパのお城や騎士の姿ではありませんか?? でも、「中世」と呼ばれる時代は、日本にもあります！
- ・「中世」という言葉には、実は深い意味があって、「中世ってなに」に答えるには、複雑な説明をしなければなりません。でも今回はそこまで考えこまず、最近発掘する機会の多い「中世」の遺跡から「こんなふうに、当時の生活や社会、文化について考えながら発掘しているよ!」ということをお伝えする企画です。
- …なので、本誌の中では「中世」をこんなふうにイメージしてください。



平安時代の終わり頃（11世紀後半）から鎌倉時代、室町時代をへて、織田信長や豊臣秀吉が活躍するまで（16世紀後半頃）の時代

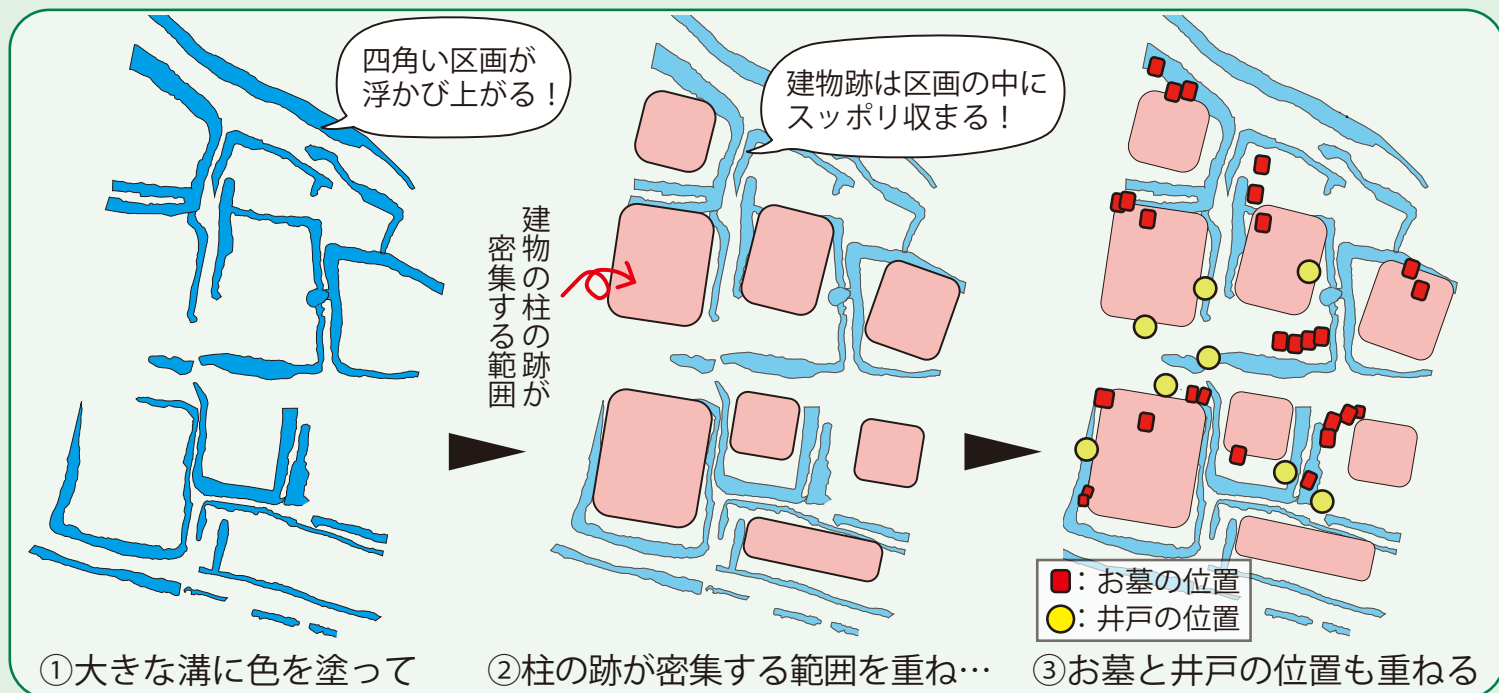
※白河上皇の院政開始(1086年)から、豊臣(羽柴)秀吉の太閤検地(1582年)までが中世とされています。

中世の遺跡で考える① 御山亮済の場合：平面構造から村の姿にせまる

- ・約600～500年前の村がみつかった二又第1遺跡ふたまた（中央市成島）。お堀のような大きな溝や、建物の柱のあとのほか、井戸やお墓がたくさん見つかりました。

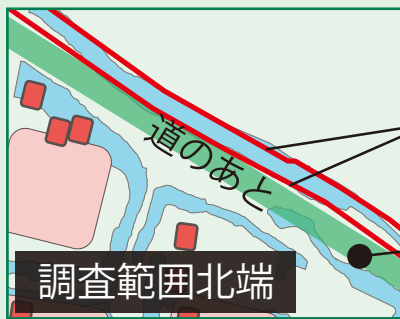
視点その1：大きな溝は、屋敷の区画。その中に建物やお墓、井戸がありそう

- ・「発掘された大きな溝は、村の中の土地の区画を表すかもしれない」…と考えてみると、コの字に区画された溝の中には①建物の柱穴の密集、②生活に不可欠な井戸、③今でも山梨に多くみられる「屋敷墓」とみられるお墓がセットになっていることもわかってきました。
- ・それぞれに独立した屋敷が集まって村になった、「集村」の姿を表していそうです。



視点その2：現代の公図にも一致する道の発見

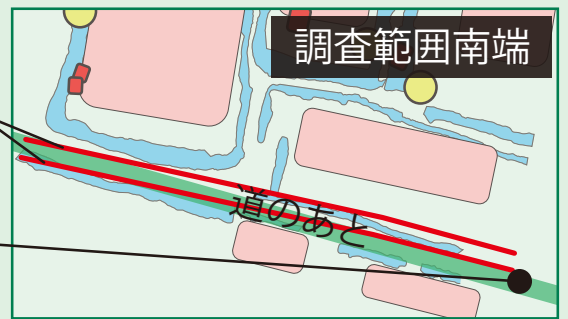
- ・溝の区画内には、建物跡もお墓も井戸も存在しない細長い空間があります（右ページの図。緑色の範囲）。
- ・これは、当時の道の跡だと考えられます。
- ・なんと、この中世の道の跡と現代の公図上の「道」の位置が一致するところがありました。…右ページにつづく。



調査範囲北端

…公図上に残る「道のあと」

…発掘された「道のあと」



調査範囲南端

↑中世の道の脇の側溝部分が、公図上の道と一致！

↑中世の道が、公図上の道と一致！

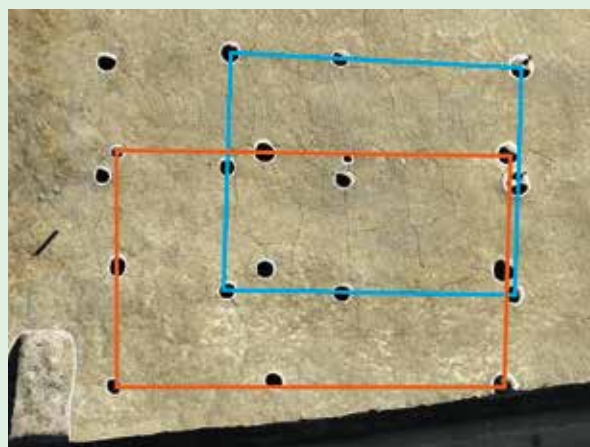
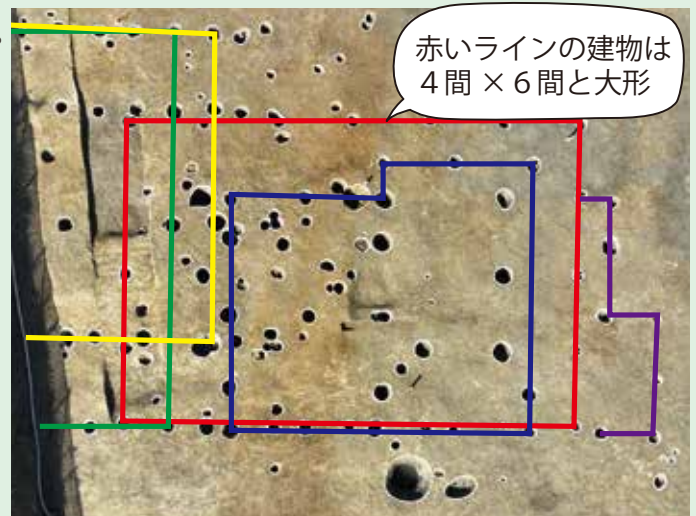
- ・二又第1遺跡は、中世の村の姿を明らかにする上で大事な遺跡であるだけでなく、中世から現代までの時の重なりの中で継承されてきたものがあることを私たちに教えてくれています。

中世の遺跡で考える② 熊谷晋祐の場合：建物配置から村の姿にせまる

- ・約600年前の村が見つかった^{おおつてんじんどう}大津天神堂遺跡(甲府市大津町)。
- ・調査によって、600以上もの小さな穴が見つかりました。中でも深い穴は、建物の柱穴の可能性がありますが。この柱穴を手がかりに、村の姿を描いてみましょう！

視点その1：建物の構造と、建て替え履歴

- ・右の写真は、柱穴の密集エリアを上からみたものです。
- ・柱の組み合わせを調べていくと、少なくとも4棟以上の建物の跡だとわかります。でも、それぞれの位置は重なっていたり、軒が接するほど近すぎたりと、同時に建っていたわけではなさそう…何度か建て替えられていたのでしょう。
- ・どれとどの建物が同時に建っていたのか、どういう順番で変遷していったのか、各建物の間取りはどうだったのか…どこまで迫れるか、分析と検討が続きます。



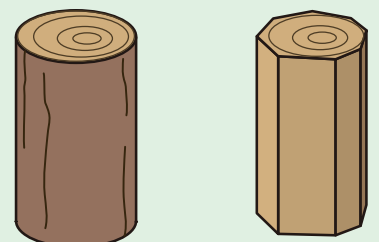
視点その2：建物の規模の違いを考える

- ・上の写真のような大きな建物跡以外にも、左の写真のような、2間×3間、2間×2.5間程度の、小規模な建物跡もみつっています。
※ 1間≒1.8m
- ・建物跡の大きさはその建物の役割を示すと考えられますが、例えば上の写真の赤いラインの大きな建物は母屋で、左の写真のような小さめの建物は物置小屋などであったかもしれません。

視点その3：建物の規模の違いで柱の特徴も違いそう

- ・大津天神堂遺跡一帯は地下水位が高いため、柱そのものが、腐らずに残っている柱穴もありました。
- ・柱の種類には、丸太のままのもの(「黒木」といいます)^{くろき}と、面取り加工されたものがあります。面取りされた柱は、大形の建物(母屋?)に使われていて、黒木のは、規模の小さな建物(小屋?)に使われている傾向がありました。
- ・当時の絵巻物には黒木が使われたテント状の小屋が描かれていて、検討のヒントになりそう。

面取り加工した柱↓



↑丸太のままの柱

視点その1：毘沙門遺跡 × 下向遺跡：居住エリアと信仰の空間？

・ 笛吹市境川町でみつかった毘沙門遺跡と下向遺跡。ほとんど同じ時代の遺跡でありながら、下のような、まったく違う特徴があることがわかってきました。この違いは、日常の住まいの場所（毘沙門遺跡）と、信仰の場所（下向遺跡）の違いを表しているかもしれません。

毘沙門遺跡

・ 今も町が広がる境川扇状地上にある。
 ・ 日常の住まいである竪穴建物が多数みつかり、その中から炊事に使う甕盛るよそうに使う壺、貯めるに使う壺といった、日用の土器を中心に、多数の土器が出土した。



下向遺跡

・ 坊ヶ峰の麓あたりの斜面にある。
 ・ 日常の住まいである竪穴建物は見つからず、石垣が発見された。
 ・ 石垣周辺から土器が見つかるが、炊事に使う甕や日用の壺などは希少で、お供え用と考えられる柱状高台付き土器や脚高台付き土器がたくさんみつかった。
 ・ 和釘の出土も多く、石垣の上面には建物があったかも。

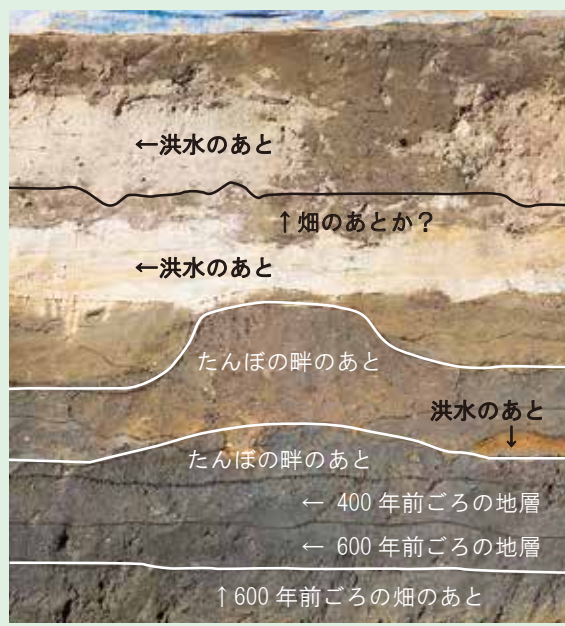


←石垣周辺から見つかったのは、こういったお供えに使われたと思われる種類の器ばかり。

・ 境川扇状地上には日常のムラの空間が広がり、境川の対岸にある下向遺跡には斜面を造成して造り出された信仰の空間がある…そんな、地域の風景をイメージさせる。

視点その2：池田神明遺跡 × 神明遺跡：洪水多発地域の土地利用

・ たび重なる笛吹川（今の平等川）の氾濫被害を受けてきた笛吹市小石和一带。唐柏、小石和、河内などの古い集落は、被害をより受けにくい微高地に立地していたようです（下の地図の橙色の範囲）。実際に、その範囲の中だと考えられる神明遺跡からは、町の一部と考えられる建物の跡やおびただしい数の土器が発見されました。
 ・ 一方、微高地と微高地の間のエリア（池田神明遺跡）でみつかったのは、畑や田んぼの跡でした。田んぼも畑も右下の写真のように何度も洪水に埋まっていた、水害と共生する土地利用のあり方が窺えます。



編集後記
 中世の村落景観について、御山は遺跡の中の空間構成、熊谷はより焦点を絞った建物や建物間のこと、久保田は反対にさらに広いエリアを対象に遺跡間の関係からアプローチしています。様々な検討を重ねながら、課題をクリアにしていき、研究していく必要があるでしょう。（久）

埋文やまなし 第71号
 発行 山梨県埋蔵文化財センター
 〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町 923
 ☎ 055-266-3016
 印刷 株式会社 峡南堂印刷所



HPはこちら